
魔法少女リリカルなのは Der Freischutz 予告編

B4U

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Der Freischutz 予告編

【Nコード】

N0517N

【作者名】

B4U

【あらすじ】

これは、とある少女の辿った軌跡。『魔法』と出会った少女が何を想い、何を成したか。過酷な運命を乗り越えた先にある少女の人生の、始まりへ至る物語。

とある少女の話をしよう。

その少女は、どこまでも平凡だった。周囲と比べ優秀な頭脳を持つ訳でなく、優れた運動神経を持つ訳でもない。家事に優れている訳でもなければ、聴く者を魅了する歌声を持っている訳でもない。少女は、そんな何処にでもいるようなありふれた存在だった。

そして、そんな少女の夢もまた、どこまでも平凡だった。普通に学校に通い、友人らと談笑する。やがて異性と恋に落ち、結ばれ、子を授かる。ささやかだが、幸せな生活。

自分も両親の様にそういった人生を歩むのだと、少女は疑わなかった。

だが、少女にとって世界は決して優しくなかった。世界は少女に過酷な運命を突きつける。

後頭部で纏めた、長い濡れ羽色の黒髪を揺らしながら、夜の街を駆け抜ける少女が一人。その様子は傍から見ても尋常じゃない。何かから逃げる様な、必死な形相である。少女は何度か後ろを振り返り、何も居ない事を確認して立ち止まる。

肩で息をしている少女。その背丈から判断するに、年齢は十歳前後であろうか。

今はまだそれほど遅い時間ではないが、小学生が一人で出歩いて良い時間帯では無い。だがそれを咎める者どころか、人一人見かけないというのは、少しばかり異常であると言えよう。

そして何よりも今この状況を、幼い彼女にすら異常だと認識させている存在。先程から少女を追ひ回している、異形としか形容

出来ないモノの影。

「もう、一体何なのよ！」

少女は叫ぶ。世の中の不条理を。何故自分がこんな目に遭わなければならぬのかと。

幸いにして影の持ち主は少女よりも足が遅く、彼女が走り続ける限り追いつかれる事はないのだが
「ッ！」

半ば生存本能とも呼べる直感で、少女はその場から駆け出した。その直後、数秒前まで少女が立っていた辺りからは、耳をつんざくような轟音。少女が振り返ればそこは、如何なる手段を用いたのか アスファルトが抉れ、クレーター状になっている。そしてその更に向こう側には、先ほどの異形が居た。

” どうする、どうすれば『アレ』から逃げ切れる？ “

少女は走りながらも思考を止めない。どうすればあの異形の影を振り切れるか、その答えを見つけるまでは

×

×

『魔法』

それが少女の平凡な、ささやかだが幸せな生活に紛れ込んだ不純物。だが少女はその不純物を自身の一部として、その人生に取り込んだ。

自身を救ってくれた白い少女の様に、自分もまた誰かの力になれるように そう思い、少女は『魔導師』になることを決意した。

少女はなのは達の様に魔法の才能に恵まれていなかったが、それでも友人達のようになれると信じて努力を重ねた。やがてその努力が実り、少女は魔導師となった。

そして少女が魔導師として、時空管理局の一員として働き出した

矢先、少女の元にある知らせが届く。それはかつて自身を救ってくれた、高町なのはの撃墜の知らせだった。

つい先日、面会謝絶が解除されたなのは病室には、二人の少女がいた。一人は淡い栗毛を下ろし、その身を患者衣に包んだ高町なのは。もう一人は、なのはの撃墜の知らせを聞き、お見舞いに来た少女である。

「何やってんのよ、アンタは……」

そう切り出した少女の声色は、普段よりも暗く、重たく、何よりも苛立ちを含んだものだった。

「あはは、ちよつとミスしちゃった……。心配、かけちゃったね」

そんな少女に対し、なのはは苦笑いを浮かべながら、そう答えた。だが、それらは少女にとって、かえって苛立ちを募らせる。

「ちょっとミスしたくらいでアンタがこんな大怪我するワケないでしょうが。……」
「ただ無茶やらかせば気が済むのよ」

「ごめんね、みやび雅ちゃん……。でも、私は大丈夫だから」

私は大丈夫だから　これ以上の心配をかけまいとしたのはの言葉は、雅と呼ばれた少女の感情を爆発させた。

「アンタ、どの口で大丈夫とか言ってるのよ！ 解ってるの！？」

「それは……。でもあの時は」

「でもない！　なんでアンタはそうなのよ！　魔導師としてアンタの代わりになれるヤツは居ても、一人の人間としてアンタの代わりになれるヤツなんて居ないのよ！？」　なのに、なんでアンタは自分を大切にしないのよ！！」

少女の剣幕に少しばかり脅えながら反論を試みたのはだが、雅はなのはが言い終わるよりも早く言い放つ。

「そんなつもりは無いんだけど……。ごめんね……」

ただ謝り続けるなのはに業を煮やした雅は頭をかきむしりながら
「あー、もう！」と意味を成さない声をあげた後「もういい。今の
アタシは感情的になり過ぎてる。これじゃまともに話も出来ないし、
今日はもう帰るわ」

言い捨て、なのはに背を向ける雅。ドアの前まで歩き、ノブに手
をかけて振り向かず「……でもアンタもちゃんと考えておきなさい。
アンタが無茶をする度に、どれだけ周りに心配をかけてるのか
を」

そう言い残し、病室を後にした。

x

x

時は流れ、長いリハビリを終えた白い少女は再び空を飛ぶ。そんな
白い少女を、雅は複雑な眼差しで見つめる。

”どうしてあの子は、また飛ぶことを選んだのだろう“

なのはは、雅の「魔導師として生きていくのは辞めよう」という
言葉を、頑なに拒み続けた。

「私は、誰かの為にこの力を使いたいから」

なのはは決まってそう答えた。それ以上は答えようとしなかった。
だから雅には、なのはの想いは伝わらなかった。

なのはとの微妙なすれ違いが続いたまま、雅は今日もまた戦いに
赴く。そんなある日、雅の目の前で一人の人間が命を落とした。

その葬儀の場で、不謹慎な発言をした者がいた。

「ふざけんじゃないわよっ！」

振りぬかれた雅の右拳が、眼前の男の頬にめり込む。それを見て

も雅を止める者は居ない。それは、周囲の人間が雅と同じ事を思っていたからか。理由は定かでは無いが、誰も雅を止めないし、咎めない。ただ距離を置き、遠巻きに見ているだけだった。

一方、殴られた男は低い呻き声をあげながらも、射殺さんばかりの眼光で雅を睨みつける。

「これはどういつつもりかな、かざまつり風祭二等陸士。君は自分が何をして
いるのか解っているのかね？」

諭すような男の口調ではあるが、発せられる言葉の一つ一つには
隠しようもないほどの怒りが込められている。

「うるさい！ アンタこそ自分が何を言ったか解ってるの！？ 人
が死んだつてのに、あんな言い方ないじゃないっ！！」

雅は叫ぶ。例えば目の前の男が自分の上官であろうと関係無いと。
人の死を、無価値だとうそぶくような相手に払う敬意など無いと言
うかのように。

だが、そんな雅の訴えなどどこ吹く風、そう言わんばかりに男は
告げる。

「勿論だとも。解っているからこそ言うのだよ、彼の死は無価値だ
と。我々に何の益ももたらさない、無意味な死だと」

「なっ……」

雅は男の言葉に絶句した。そして同時に悟った。目の前の男に何
を言っても無駄だと。目の前の男は自分とは違う生き物なのだと。

だが、それでも言わずにはいられなかった。あの人の死は、決し
て無価値ではないと。無意味だとうそぶく輩を、認められる筈がな
いから。

「アンタ、絶対に地獄に落ちるわよ」

「私は客観的に事実を述べているだけなのだがね……。まあ良い。
君のその言葉、そっくりそのまま君に返そう。君は年上の人間を、
まして自分の上官である私を敬えない人間なのだからね」

「ご高説を賜り、ありがとうございます。……尤も、アンタの話
なんざ聞く耳持たないけどね」

少女は皮肉を交えて男に言い放ち、歩き出す。

「君への処分は後日、知らせが行くことだろう。その時を楽しみにしていたまえ」

男の言葉をその背に聞きながら、少女はその場を後にした。

×

×

葬儀が行われてから一週間が経っていた。

雅が葬儀の際に、上官に対し働いた暴行と発した暴言は、如何にその上官に不謹慎な発言があったとしても許されるものではない。管理局の上層部はそう判断を下した。その為雅は一ヶ月の謹慎を命じられている。

雅にとって幸いだっただのは、処分を受けたのが自分だけではないこと。詳しくは聞いていないが、上官も相応の処分を受けたとクロノから教えられていた。

それと考える時間が出来たことだった。

一人の人間の死と、その死を侮辱した男の存在。それらは雅にこれから先、魔導師として生きていくべきなのかを考えさせる。

立ち止まった雅は、これまで歩んできた道を振り返った。

初めて魔法と出会ったあの日、自分を救ってくれた白い少女。

魔導師になる為、何度も訓練を繰り返した日々と、初めて魔法が使えたあの瞬間。

やっとの思いで魔導師になれた時、友人達が開いてくれたお祝いのパーティー。

初めての任務で失敗してしまい、一人枕を濡らした日のこと。

なのはのお見舞いに行ったあの日、自分の気持ちばかりを押し付けてしまったこと。

あの人の葬式で、「無価値だ」とうそぶいたあの男の存在。

悲しい記憶も、辛い記憶もある。だが雅には、それと同じくらい楽しい記憶も、嬉しかった記憶もある。そしてたくさんある記憶の中で、雅にとってかけがえのない記憶。

任務を終えた自分に「ありがとう」と言ってくれた人達の顔。

”そっか。そうだね……。きっと、あの子もアタシと同じなんだ”
雅は、かつてなのはに「魔導師として生きていくのは辞めよう」と言った時に、返ってきたのはの言葉を思い出す。

「私は、誰かの為にこの力を使いたいから」
かつての雅は、その言葉の意味を考えようとしなかった。だが過去を振り返り、失いかけていた、一番大切にしていた記憶を思い出した今なら、理解できた。

自分の行いで誰かが喜んでくれる。その顔、その声、その想いが心地よく、次の一步を踏み出す勇気を与えてくれた。だからこそ自分は今まで魔導師としての人生を歩んできたのだと。彼女もまた自分と同じなのだ。

ならば自分が歩むべき道は、魔導師としてあるべきだ。雅はそう結論を出す。

”もう誰も傷つけさせない。あの子達も、誰も彼もアタシが守ってみせる”

決意を新たに、雅は再び歩き出す。

「だけど、今のアタシじゃ色々足りてない。全部一からやり直さなきゃ」

雅は謹慎期間を利用し、再び基礎訓練をやり直した。謹慎が解けた後も、時間が許す限り訓練を続けた。一通り基礎を学び直した後は、これまで手をつけていなかった分野にも手を出し始めた。学び、実践し、鍛え、また学ぶ。雅は少しずつではあるが、確実に強くな

つていった。

そして時は現在^{いま}へと至る。

「……機動六課？」

「せや。前にメールしたと思うんやけど、覚えてる？ 出来れば雅ちゃんにも参加して欲しいんよ」

雅の対面に座る、黒い、ともすれば茶色にも見える髪を短く切り揃えた彼女 八神はやてはそう問うた。

それを聞いた雅は目を瞑って考え込む。彼女の頭の中では、はやて、メール、以前といった単語の羅列が浮かび、それらに関連する記憶を掘り起こそうと、活発に活動している。

やがて該当する記憶があったのか、雅は目を開け「あ……」と呻き声に近いトーンで思い出しました、というアピールをした後「自分の部隊を持てたらってヤツね。って言うかさ、前にとって程度の話じゃないじゃない。あれから何年経つてると思ってるのよ？」と聞き返す。

「まあ、わたしの方もあれから色々あったんよ。それで今度ようやく自分の部隊を持てるようになってな。その部隊に雅ちゃんも来てくれへんかなーって」

「友人として参加してあげたいのは山々だけど、今はまだ具体的な話を聞いて無いしね。すぐに答えは出せないわよ」

「むう。わたしとしては雅ちゃんにも入って欲しいんやけどなあ。まだ詳しくは話せんけど、今回は色々と大変な事件になりそうやし……」

そんなはやての台詞に雅は「何言ってるのよ」と苦笑いを浮かべ「今回は、じゃなくて、今回も、でしょ？ アンタ達はいつだって自分から大変な方に向かって歩いて行くんだから」とため息混じりに切り返した。

それを聞いたはやてもまた苦笑いを浮かべ「言われてみれば確かにそうやね」と言い、やがて俯き「どっちにしろ雅ちゃんにはまた心配かけてまうけど……」と呟く。

二人の間に気まずい空気が流れ始めるが、それを払うかのように雅が再び話し始める。

「もう慣れたわよ。まあ入るかどうかはその部隊の内容次第だけどさ、入ったらアンタ達が無茶しなくて済むように頑張るわよ」

「そか、まあ今度勧誘に来るときはちゃんとした資料とかも持ってくるよ」

「そうしてくれると助かる。それじゃアタシは仕事に戻るわよ？」

「うん、わたしもそろそろ時間やしね」

言い終わると同時に立ち上がるはやて。それに合わせ、席を立つ雅。

「それと、ゴメンな？ 休憩中に来てもうて」

「別に気にしなくてもいいわよ。アンタの方が忙しいんだしさ」

「うん。それじゃあ、また今度」

「また今度」

ロビーに向かって歩き出すはやてを見送りながら「はてさて、一体どうなることやら」と一人つぶやく雅であった。

（後書き）

魔法少女リリカルなのは Der Freischutz 予告編、
如何でしたか？

面白く書けているか不安で仕方の無い作者ことB4Uでございます。

もし面白いと思った方が居れば、一言でも良いので感想を頂けると
幸いです。

なお、活動報告にちょっとしたアンケートがあります。

今後投稿する本編に生かしていきたいので暇があればお付き合いく
ださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0517n/>

魔法少女リリカルなのは Der Freischutz 予告編

2010年10月8日22時42分発行